少年犯罪に関する研究
―特に、犯罪が起こる原因と今後の課題について―

山下　拓磨　（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　中薗　伸二

キーワード：少年犯罪　学校　家庭　文化

１．緒言

現在日本では、減少傾向ではあるが少年犯罪が相次いで発生している。しかし、問題は犯罪の数ではなく、少年によって凶悪な犯罪が起こされているという現実である。

そこで、少年犯罪が起こる要因を挙げ、課題や対策を考察し、今後生徒を指導する場面、または学校以外で子どもと関わる場面に活かすために、本研究に取り組んだ。犯罪の種類は様々であるが、本研究では、殺人などの凶悪な犯罪に焦点をあてる。

２．研究方法

文献調査で研究を進めていく。過去の事件（31 件）の背景を詳しく調べて事件の主な要因を挙げ、対策を考察する。

３．結果と考察

少年犯罪が起こる要因を学校に関すること、家庭に関すること、文化に関すること、その他に分けて挙げると以下のようになる。

まず、学校に関することで最も多かった要因がいじめである。また、学力を重視した風潮が学力競争の学校社会を生み、人間性の教育が不十分になってしまうという考察結果になった。次に、家庭に関することでは、家庭環境の影響が最も多い。両親が離婚したり、共働きであったりして、十分な子育てができていない例が多い。次に、文化に関することでは、ビデオやテレビゲームなどの暴力的な仮想世界の影響により、現実との区別がつかなくなってしまった結果、殺人を起こしている。また、テレビや新聞などのメディアから得た情報に少年が興味をもち、犯罪の要因になるという例もある。そのほか、少年の人格や過去の事件の模倣、悩みを誰にも打ち明けることができずに孤独を感じていたことが要因として挙げられる。

少年犯罪を防ぐために、本研究で挙げられたすべての要因についての対策を考察するのには限界があるので、教師として子どもと関わる時に注意すべき点を挙げると、いじめを防ぐこと、子どもに孤独を感じさせないこと、発達障害の子どもへの適切な指導の３点である。

４．まとめ

少年犯罪発生要因は、学校、家庭、文化などの要因が複合的に関連していることが示唆された。今後もメディアが発達し、テレビや新聞、雑誌、携帯電話、インターネットなどの情報源が犯罪の要因となる可能性がある。また、今回は過去の事件の数を絞ったが、すべての事件を詳しく研究すると違う要因も考えられるであろう。

参考文献

嶋崎政男(2006)　少年殺人事件　その原因と今後の対応　防止のために親や教師ができること．学事出版.
玉井正明、玉井康之(2002)　少年の凶悪犯罪・問題行動はなぜ起きるのか．ぎょうせい.
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8　（ウィキペディア　フリー百科事典）